salamander in the circle

第三十四章　死神の息吹：神々の再来

峯村　明

Salamander in the circle

第三十四章の登場人物		
イリチヤ	……	火精霊。ヒューダーが名付けた
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
レガリオ	……	アンペレオ王国の国王
トヨケ	……	スクナの祖父・タカミムスビー族の長老
アマセオ	……	タカミムスビー族に連なる者
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者
コタエ	……	スクナの妹・島の王の妻のひとり
ミツハ	……	水精霊・メッサナの生みの親

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー
	ティコ	科学者
	ナシル	本部・事務職員
	ヤスウ	学術調査団の団員
	ダーヴェ	学術調査団の団長
	ヒューダー	学術調査団の団員
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長
	ヴァリス将軍	レルの父
	カール	王子　ヘルガの弟
	ロウナス	国務省の高官
	アンテロ	レルの副官
	摂政	亡国王の弟
	ヘルガ	王女
ケストル王国	パウル	国王
	ウルリク	第三王子
	ヘンリク	ウルリクの息子
	ホペオクー	ケストル人の美女
	ソルド	闘技場の警備隊長
黄金門市	皇帝	皇帝
	パソネル	バイスロイの参謀
アンペレオ	ソラン	祭祀長
	ドゥル	ペレオーサ家の当主　シパドの兄
	シパド	ペレオーサ市の新総督

世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長　マミヤの父
	オマキ	ホシナの妻
	キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ゴン	ホシナ族の男　（ヤサカオ族出身）
	サノヒコ	王に仕える役人
	フツヌシ	王に仕える者　将軍
	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	チドリ	アマセオの妻
	ハマツ	チドリの養父
	タマシギ	ハマツの実子
	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者
	マミヤ	ホシナ族の娘
メッサナ市	パンテオラ	メッサナ市の総督
	メルノ	音楽家
	バルダリス	メッサナ総督家の一人　臨時総督代理
	メンドルプ	メッサナ化学者団の代表
	バラム＆バランケ	双子のジャガー　パンテオラの部下
冥界	冥界王	冥界の王
	ベネトナシュ	死神
	テクトリ	最下層ミクトランの主
	プラトニオ	メッサナを追放された化学者

目次

死神の息吹・神々の再来
502.
503.
504.
505.
506.
507.
508.
509.
511.
512.
513.
第三十四章のあとがき
これまでのあらすじ
奥付

死神の息吹・神々の再来

502.

　スクナとミツハの対話に耳を傾けながらコタエの超感覚はメルノと接触し、メルノの過去を追体験していた。

　強い陽射しを浴びてそびえる壮麗な台形ピラミッド。爽やかな青い色に彩られた建物。地面に濃い影を落とす南国の木々の大きな葉。からりと乾いた風が吹き抜けて肌をなで、髪をもてあそぶ。みずみずしい匂いは花か、果物か。人々は明るくさざめき、また熱心に言葉をかわす。

　ああ、とコタエはめまいを覚える。初めて見る場所だが、初めて見たという気がしない。懐かしい故郷へ帰ってきたという気さえする。石造の巨大な都市であるにもかかわらず、無機質な雰囲気はなく、なんぴとをも受け入れる。懐が深く、柔らかく、暖かい。メルノが生まれた地は、なんという心地よい場所なのだろう。

　この惑星上では、ただ一種類の人類が生きているわけではない。さまざまな進化段階の人類がさまざまな土地に分かれてそれぞれの道を歩んでいる。ゆえに、他国のことは参考にならなければ気にもならないのだが、コタエは心が揺らぐのを感じる。それは彼女に限らず、一度でもメッサナを訪れたことがある者なら皆が皆、そう思わずにいられない。この地で思う存分、生きたい、と。

（自分が自分でいる……純粋に自分自身である……
魂の要求そのもの……魂の開示……）

恍惚と幸福感に満ちて、コタエは際限もなくそんなことを繰り返し考えている。すっかり、心を奪われてしまっていた。しかし我を忘れるというのでもない。心はある意味、緩んでいるのだが、なにかが、それとも、誰かが、完全に緩んでしまわぬよう制御している。そう、今風の言葉なら、リミッターが働いている、とでもいおうか。ただし、窮屈さは感じない。もちろん恐怖など感じない。何か、あるいは誰かへの全幅の信頼が、心置きなく、任せ、やがて開放させるのだ。魂の要求を。

（なんという土地なの……！）

世界の果ての島を生地とし、王の妻の一人としての人生を選んだのはほかならぬコタエ自身である。苦難はいくらでもあったが、しかし悔いたことはない。この人生は己の魂が選んだのだから。

（とはいえ――）
メッサナの地はあまりに魅力的だった。魂の選択だろうがなんだろうが、なにもかも投げ捨ててこの地で生きたい！！

コタエは熱烈にそう欲している自分に驚いた。
（この要求が魂からのものであるなら――もし――叶うなら――）

いっしゅんの葛藤が呼んだのか。メッサナの紺碧の空がふと陰った。

メルノを襲った恐怖の体験は、コタエの願望を粉々に打ち砕いた。なにをどうすれば、人はこれほど残酷になれるのか。メッサナ市民は同胞の人間に対して罵詈雑言の限りを投げつけ、物理的に精神的に、踏みにじった。

スクナをもパニックに陥れたその攻撃を追体験することによって、コタエは確信した。メルノを襲ったのも、ヘルガを襲ったのも、その根源には同じ波長があった。

メルノが正気でいられるのはミツハの庇護下にあるからだと、コタエはあらためて納得する。ミツハの助けがなければメルノはとうに狂っていたにちがいない。

503.

ミツハは手の中の金貨を握り締める。
このようなものが流出しているということは、メッサナはもはや――

死神ベネトナシュは冥界王によって封じられたことをミツハは知らない。だが、今、その存在を、影響力を、ありありと感じていた。ミツハにとっては取るに足らない小物なのだが、人間にはそうではない。市民はどれほど苦しんでいることだろう――！

（できるものなら――助けてあげたい――）

だがしかし、元素霊には人間の望まぬことに手を貸すことはできない。メッサナの市民たちは既に恐怖のなかにどっぷりと浸かってしまっている。それはメッサナを乗っ取ったベレオーサを通して現れる死神の影にすぎないのだが、市民たちは影の前にひざまづいてしまったのだ。

504.

　今のメッサナに、私ができることはありません、と、ミツハは辛そうに言った。それはスクナの無言の問いかけとも期待ともいえるものへの答えだ。

「たしかに私はメッサナに最初の衝動を置きました。けれどそれを芽吹かせ、育み、花を咲かせたのは人間たちです。時が流れ、花を散らせたとしても、そう選んだのは人間なのです」

「う……むぅ……しかしだな、ミツハさんや」

「スクナさま。私は人間が望むことを叶えるだけ。『彼』がそうあるように。私たち元素霊は自然のことわりのなかに生きるだけなのです」

「……地上最強の魔人ジーニーが法則のなかで生きていたように、か……？」

「ジーニー？？　どなた？？　元素霊であろうと魔人であろうとこの世界に生きるものはこの世界の法則から自由ではいられません。ただ……この子だけは……別……」
　ミツハの言葉はほとんどつぶやきと化して、スクナの耳に届かなかった。

「兄上」コタエはためらいながらスクナに声をかけた。
「メルノさんは、標的にされましたわ。無作為に選ばれたように思えますけれど、わたしはそうではないと思います。メルノさんは選ばれたのです。注意深く、狙いすまして、白羽の矢が放たれたのです。何故？　彼女の影響力の大きさ。人々の心を突き動かす力の大きさゆえに。矢を放った者にとってそれは恐怖だったからだと……」

「メルノの音楽の力が……？」

「そう。『矢を放った者』には抑制された感情、冷静な高い知性があるようにわたしには思えました。まさに人離れした存在。そんな存在が恐怖を感じていた。人が魂の要求のままに生きるということが、その存在にとってたいへんな脅威だった。なぜなら――」

　その存在、すなわち、『彼』を脅かすからだ。

　ミツハは自分が今、メルノの故郷メッサナを遠く離れた『世界の果ての島』にいる理由を知った。メルノはある意味、希望の種子なのだ。メッサナはおそらく永久に失われる運命にある。その時には――この異郷の地が新たな故郷になる――

505.

　トヨケは膝の上においた黒い毛皮を撫でている。慰謝を与えるように、やわらかな手つきで。アマセオはそれをじっと見つめている。

「天界は厚い層を成しており、冥界もまた厚い層を成している」トヨケは枯れた声でそういう。
「かつて、天界に『大熊の座』という場所があった。われわれが『北極の座』に故郷を持つように、『大熊の座』を故郷とする者がいた。彼らは高い志を持ち、人間とともに歩む者だった。人間は彼らを慕い、彼らは人間を慈しんだ。ある時、人間の間に不和の種が蒔かれた。その種は人間の進化のために必要なものだったのだが、人間は不和の毒を克服できなかった。毒に苦しむ人間たちを理解しようと、『大熊の主』は人々に歩み

寄った。あげく……毒された人間に引きずり降ろされてしもうた」

「それが、冥界の王？」

「『大熊の主』には多くの廷臣がおった。彼らもまた主と運命を共にした。引きずり降ろされ、冥界に繋がれたのだよ。まことに……人間の力とは空恐ろしい。彼らはいまも人間を恐れる。人間の魂の持つ本来の力を。恐れるゆえに、その力を封じようとするのだ」

「そうはいっても、トヨケさま。人間とは不自由なもの。時間に制限され、空間に制限され」

　トヨケはしわ深い目元に笑みを浮かべた。

「アマセオよ。人間の魂は時間にも、空間にも、縛られぬのだぞ。そもそもそなたは、そのことを経験するために人間のふりをしているのではなかったか？」

506.

　ネウトラ評議会の人間はかの原子爆弾爆発以来、死に絶えてしまったかというくらい、世界のどこからも、ひとりも名乗り出なかったし、アンベレオ王国も探し出す労をとらなかった。ベレオーサ市に潜伏していた二名がのこのこと出頭してきたものだから、この二名を吊し上げ、評議会そのものを有罪とするには十分だったのだ。

「いかなる理由があろうと、ネウトラ評議会の原子爆弾製造と使用とは人類に対する犯罪である」

　そう判決を下しておいてから、アンベレオ人たちは、嗤った。この二名を。馬鹿正直にもほどがある、と言って。

507.

　ベレオーサ・シパドは本国の王レガリオを迎える準備に煩忙を極めていた。
　本心はレガリオなど勝手に来ればいいと思っていたし、マミヤやジャガーをもっとかまっていたぶっていたかったのだが、本国から次々と送られてくる指図を無視できなくなったのだった。
　他人からの指図をなにより嫌うシパドだったが、なにが彼女の心を動かしたものか。それは「美貌の女総督」「史上最高の女統治者」という、蝶よ花よ的な称賛の声だった。言うことを聞かない妹をなんとかしようと、シパドの兄ドゥルが一計を案じ、一族の者を使って称賛の声なるものを市中にばら撒いた。称賛が市民の本心かどうかはどう

でもよかった。いたって単純な性格のシパドは称賛通りにふるまわねばと考えたのだった。

　ドゥルはそうやって妹を担いでおいてから、例の男を捜すよう、部下に命じた。例の男とはシパドが夫だと言って連れてきた、あの男である。芸術家だということしか、名も素性もわからぬ男を捜せとの命令はあまりに無理難題だったが、その男がシパドを御するカギになるならばと、一本の麦わらにすがりつく思いで、ドゥルの部下はアンベレオ王都へ向かった。

　そして、その男、バイスロイは国王レガリオの庇護の下にあった。
　ベレオーサ市で起こった事件は、バイスロイの耳にも入っていた。シパドが異国の少女をジャガーに襲わせようとしたことだ。
　異国の少女というのは、金星神の神殿で捕らえられたという。ボムソワールの劇場に住民を集めておいて、飢えたジャガーと娘を対峙させたことはバイスロイの神経を逆撫でした。彼は金星神を祖にもつ一族、血が騒ぐのも無理はない。凄惨な方法で喧嘩を売られたととらえることもできるのだ。

（だが落ち着け！　バイスロイよ）
　彼は必死に自制する。
　しかし、落ち着いてはいられない知らせが、ふたつ、レガリオ王を通じてバイスロイの耳に届いた。

「ベレオーサ・ドゥルがそなたを探している。バイスロイ」
「――だれですかそれ」
「ベレオーサ家の長兄。シパドの兄君」
「思い出した！　私はその男に館を放り出されたんだった！！　なのに今さら何だと言

うんでしょう！？」
「よほどそなたが必要なんだろうよ」
「！！！！！！」

　もうひとつは――ネウトラ評議会の有罪判決である。
「評議会が有罪になるとどうなるんです？」
「……」

508.

「評議会の人間が二名、出頭しているのだ。彼らは罰を受けることになる」
「――その者たちの名は――」
「なぜそのようなことを？」
「評議会に知り合いがいるのです！　まさかとは思うが――　頼む、教えてくれ！　レガリオ！！」

　レガリオは眉をひそめ、じっと相手を見つめた。気のせいか、人が変わったように感じたのだった。不思議に思い、逡巡しつつ、これは独り言だと、聞こえないような声で二名の名をつぶやいた。

　はたしてバイスロイの表情は凍りつき、よろよろと手近の椅子に座りこんでしまった。それから宙に目を据え、一心になにごとか考え始めた。レガリオはそんな友の様子を心配げにうかがっている。やがてバイスロイが口にしたことは思いがけないことだった。

「レガリオ、陛下、『彼』に会わせてほしい」
「『彼』とは……まさか、あのお方？」
「そうだ、貴方が信用できると仰せになった、『彼』だ。私は『彼』に会わなければならない」
「――バイスロイ、なぜ？」
「評議会のヒューダーは『彼』の名づけ親だからだ。『彼』にイリチヤと名づけたのはヒューダーなのだ」

509.

「そなた何故あのお方の名を知っている！？　評議会のヒューダーがあのお方の名付け親！？　ではふたりは親子！？」

「話せば長い。ただ、彼らは親子ではない。学のおありの陛下のこと、ヒューダーとイリチヤ、剣と槍、ふたつのことばが対になっていることはおわかりのはず。ヒューダーはあの少年に名がないのを哀れに思って自分と対になる名をつけたのだと言っていた。そして少年はその名を受け取った。名前の授受が親と子の関係を意味するなら、その意味で、彼らは親子であるといえるかもしれない。私は、ヒューダーとそう語りあった」

　レガリオ王は少なからぬ衝撃を受けた様子でバイスロイの言葉を反芻していたが、やがて絞り出すように言った。
「打ち明けるが、バイスロイ、あのお方イリチヤどのは――代理人だ」
「そうらしいな。記念硬貨にそう刻まれてる」
「いかなる代理人かと言えば、『神の代理人』なのだ。我が国にとって、きわめて重要な立場におられる。今は祭祀長の管轄のもとで厳重に保護されている。会わせてやろうにも、私の権限ではどうにもならないところにおられるのだよ。そもそも、ご本人が人

と会うのを拒んでおられる」

　バイスロイの口から「貴方は国王だというのに？」というセリフがつい滑り出た。己の権力の無さを自分から白状してしまったレガリオは肩をすくめて苦笑いを浮かべた。

「アンベレオ王国とはそういう国なのだ。国王も、祭祀長も、実はただのお飾りさ。まことに権力を持つ者が裏側からすべてを牛耳っている。私と祭祀長は健全で若々しい王国を演じて見せているだけなのだ」
「なんということだ――」
「この構造に大きな問題があることはわかっている。わかっているが、簡単には崩せない。アンベレオのまことの権力者は旧メッサナを――メッサナ市の自治に問題があるからという理由で乗り込み――手に入れ、なかでも黄金郷を王家の直轄地としてしまった。力はさらに増した。長年に渡って構造のなかに組み込まれてしまっている者にはどうすることもできない」
「……長年に渡って？……いったい、いつから？」
「そうだな、この体制は千年は優に超すだろうか」

　バイスロイは脱力する思いだ。全世界の王国の王を自任する黄金門が、アンベレオがそんな国だったとは知らなかったのだ。この王国は極めて巧妙に、『善き国』を演じていたのだった。

（私はなにも知ろうとしなかったということか――）

510.

　祭祀長ソランもまた甚だしい煩忙のなかにいて、国王の立場でさえ容易につかまえる

ことができなかった。彼女もまた国王のベレオーサ市行の準備に携わっていたからだが、忙しいのには理由があった。

　アンベレオ王国には『神々の再来』という祭礼がある。故郷に戻っていた神々が再びやってくるという祭りで、毎年決まった期間に華麗な流星が夜空を彩るのだ。南国の夜空に無数の流れ星が筋をひく光景が連夜楽しめるうえに、祭司による荘厳な儀式も行われるため、人々にはたいへんな人気があった。ちなみに旧メッサナ市にこのようなイベントはなかった。

　この流星は、実は大熊座流星群である。
　アンベレオ王国は本来、金星神を信奉する国であって、祭祀が大熊座流星群に対して儀礼を行うというのは考えてみればおかしな話である。のだが、アンベレオ王国（の経済界）はこの祭りを人々が喜ぶように、慎重に作り上げたから、人々は健全で美しく華やかな、厳かな祭りを疑うようなことはなかった。

　そしてこの祭りは、五十二年に一度という周期で大祭が巡ってくる。
　アンベレオが旧メッサナ市を手にしたこの年は、まさにその大祭の年だった。

　偶然にも国王レガリオのベレオーサ市行幸と大祭の日程がぴったり重なっていたのだ。

511.

「偶然かもしれん。そうでないかもしれん」
　トヨケがつぶやくのをアマセオは聴く。

「トヨケ様のお話からすれば。偶然なわけがないと思われますが」

「……」

「――で――その五十二年に一度の大祭とはどのようなものなのですか、何が行われるのですか」

「例年の『神々の再来』はただ美しいだけだ。人々は降る星に歓声をあげ、酔いしれ、ひざまづき、祈りを捧げる。やって来た神々は人々に生きる力を与え、また帰っていく。だが――大祭は違う」

「どのように」

「神々は五十一年に渡って人間に力を与え続けた。その代償を要求するのだよ」

　アマセオは耳を疑った。代償を要求する神々。

「私の知っている神とは無限の包容力を有し、なんの見返りも求めぬ。崇拝と思慕の高みに仰ぎ見る存在です。代償を要求するとは、それははたして本当に『神々』なのですか」

「人間が神々を、そのようにしてしまった。人間は己のありように見合った神々を見るだけだ」

「……」

「大祭は一般に公開されてこなかった。秘儀の中の秘儀として、人の目から隠されてきたのだ。アンベレオの植民地から、戦地から、大勢の人間が送られてくる。犯罪者として。捕虜として。そして神殿に招き入れられる。神殿とは金星神の神殿だ。アンベレオの国民は犯罪者や捕虜を受け入れる神を誇りに思い、なお敬う。だがその神は金星神にあらず。代償を求める神だ」

「その秘儀中の秘儀が、此度、旧メッサナ市で行われると？」

「そういうことだ」

　旧メッサナ市が完全に封鎖されているのは、そのためだったのである。

512.

「旧メッサナ市に閉じこめられている人々は神々に捧げられるということなのか！？」

　バイスロイの詰問にレガリオは横をむいたまま応えた。「正しくはアンベレオ人ではない、外国人、犯罪者――」

「ならば。私もそのひとりだ」
「何を言うバイスロイ！　そなたは私の友人なのだから！」

「評議会のダーヴェもヒューダーも私の友人。旧メッサナにはほかにも何人か、外国人の知り合いがいる。私は彼らを見捨てることはできません」
　バイスロイは首を振って立ち上がった。「イリチヤのことも気がかりだ。ヒューダーのことを教えてやらなければ――」

「待ちなさいバイスロイ！　王宮の外へでればベレオーサ・ドゥルの手の者が待ち構えていることを忘れないでおくれ！」

　うっとバイスロイは思わず呻いた。シパドにつかまったらそれこそ身の破滅だ。

　それとも……と、肩に置かれたレガリオの温かい手を感じつつ、バイスロイは考えていた。
　ドゥルなりシパドなり、ベレオーサの人間にとってこの身がどれほどの価値があるか知らないが、自ら投じることによって大祭の行方を変えられぬものか……

513.

一方。誰に教えられずとも、イリチヤはダーヴェとヒューダーの有罪判決を知った。その衝撃は計り知れなかった。有罪判決とは彼らの死を意味していたから。

居てもたってもいられず、彼は閉じこめられている王宮の一室から抜け出そうと考えた。そのときになって初めて、己が身に起きている異変に気がついた。
翼竜への変身ができない。

彼の変身はイメージするところから始まる。自分の周囲に炎が立ち上がり、燃え上がるイメージだ。難しいことではないし、いくらでもできる。なのに変身できない。エネルギーが足りないのか、長いうつうつとした精神状態のせいかもしれない、違うかもしれない。なぜなのかわからない。

彼は黄金の環のなかに閉じこめられてしまっていた。

第三十四章『死神の息吹・神々の再来』

第三十五章へ続く

第三十四章のあとがき

いままであとがきで何度か触れていますが、メッサナ市のモデルはテオティワカンです。

メソアメリカの歴史は古い方から、オルメカ、テオティワカン、マヤ、サポテカ、トルテカ、アステカ、等となっています。スペイン人が入ってきた16世紀はユカタン半島ではマヤ、中央メキシコではアステカ、南米ではインカが栄えていた時期で、スペイン侵略によって原住民の文化は途絶えてしまいました。

マヤ、アステカ、インカに共通する有名なものといったら、人身供儀。これはオルメカの時代には既にあって、異なる地域・文化の間を延々と受け継がれ、ついにスペインのフランシスコ会修道士、ベルナルディノ・デ・サアグンによってヨーロッパに紹介されました。
サアグンはメキシコ現地で行われた祭祀の様子を六十年にわたって観察しました。あまりにも壮絶なその内容…サアグンは現地で祀られている神々は悪魔であるとみなし、人々に祭祀をやめさせようとし、またそのことを本国に知らせたのでしたが、一部の修道士はサアグンの報告を現地の偶像崇拝や古い祭儀を奨励する危険なものと考えて冷遇し、現地人は祭祀をやめなかった。アステカの祭司たちは次のように自らを弁護したといいます。
『人生は神々のおかげです。彼らは犠牲を払って（神々は太陽をつくるために自ら犠牲になった）私たちに命を与えてくれました。それらは私たちの生命を育みます』

アステカでは一年十八ヵ月（20日ｘ18ヵ月＋5日＝365日）の各月に、国家規模での重要な宗教的祭祀が催されていた。どの祭祀でも大量の供儀がされたが、第十八の月（祭神は火の神シウテクトリ）だけは、供儀はなかった。
『しかし四年ごとに巡ってくる閏年には、祭りで捕虜や奴隷が殺された。捕虜たちが死ぬときは大規模な儀式がいくつも執り行われ、その数はこれまで述べた祭りの比ではなかった　（サアグン　フィレンツェ文書より）』

というのが、アンベレオ王国が旧メッサナ市でやろうとしている祭祀のモデルです。

テオティワカンの建築技術、マヤのカレンダー、天文学、インカの貴金属の加工技術。その一方で彼らの精神生活にはいたって素朴な部分があり、人身御供という強烈な特徴のある、共通の文化を持っている。ふしぎなことです。彼らの背後には共通のなにかがあったと思わざるを得ません。スペイン人が焚書にしたもののなかにその答えがあったかもしれない。

ブラヴァツキーは『シークレット・ドクトリン』のなかで、秘儀は当時のアトランティス人によって中南米、メキシコ北部、ペルーに持ち込まれた、と言っています。
『彼ら（秘儀者？）はスペインが侵略してくるまで存在し続けた。メキシコとペルーの記録は破壊されたが、プエンテ・ナシオナル、コルラ、テオティワカンに散在する多くのピラミッド（古代のイニシエーションのロッジ）に冒涜的な手を振りかざすことはできなかった。パレンケの遺跡、および中央アメリカの他の遺跡は、多くの人に知られている。ギエンゴラとミトラのピラミッドと神殿がそれらの秘密を暴くなら、現在の教義は自然界で最も偉大な真実の先駆者であったことが示されるだろう』

2024年3月12日　記

これまでのあらすじ

第一部
はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可と依頼によるものだった。
ネウトラ評議会・学術調査団の団長ダーヴェとヒューダーとがホシナ族のもとへやって来た。絶滅危惧種・巨人族の調査のためである。しかし巨人族の姿は見えず、ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤが行方不明になる。ダーヴェの痕跡を追って島を発った団員ヒューダーとヤスウは移動中に緊急事態信号を捉えた。ヒューダーは信号発信元のエウメロス王国へ、ヤスウはダーヴェを追ってケストル王国へ向かう。
エウメロス王国は巨人族の大群に襲撃されていた。ヒューダーの説得で国王は城を棄てて避難、ケストル王国へ赴いたまま帰国できずにいる王女ヘルガを迎えに、近衛隊長レルはヒューダーと共にケストル王国へ。
エウメロスとの国境付近にはケストルが密かに造った離宮と闘技場があった。そこにはヘルガ王女もマミヤも捕らえられていた。ヒューダーたちは評議会の人間として離宮に入り込むが、ひとりの少年を密入国させたとして捕らえられてしまう。
成り行きからヒューダーは少年にイリチヤという名を与え、闘技場で戦うことになる。

第二部
エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……
一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。行き場を失い、郊外の湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。
同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々とを恐怖に陥れようと画策していたのだった。

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理パルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

第三部
黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。
ある日、アマセオの妻に三つ子が生まれたという知らせが届いた。自身も三つ子であるアマセオは困惑する。三つ子は王位継承の証しであり、その存在は間違いなく混乱をもたらすからだ。
妻子に逢うため帰郷したアマセオは、妻の兄タマシギと語りあううち、タマシギが秘める野望を知る。機織りのシトリ族の立場を盤石なものにしたいがために、タマシギは禁忌に手を染めていたのだ。アマセオが己の前に立ちはだかろうとしているのを感じたタマシギは政庁のフツヌシに訴え出る。フツヌシは王の兵士であるアマセオがホシナ族に接近していることをかねてより懸念していた。
そんな折、三つ子が怪鳥にさらわれるという事件が。怪鳥の正体はアマセオの弟だった。生後すぐに間引きされた弟カガセオは、手をかけたタマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のために手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

黒曜石事業の権利を拡大解釈したとの理由で、フツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。そこには王位継承が絡んだ陰謀が大きな影を落としていた。現王と深い関係にあるホシナ族、ホシナ族に近づくアマセオは陰謀と戦いに巻き込まれたのだった。
ホシナとアマセオは旧知のヤサカオの助力を得、フツヌシ軍を迎え撃つ。

第四部
母国エウメロスへ帰還した王女ヘルガを待っていたのは、黄金門市の皇帝。彼らもまた巨人族襲撃によって故郷を失っていたが、その際エウメロスの国土へ直行したのは、そこには太古の地下都市・『トゥランの七つの洞窟』への入り口があったからだった。
巨人族の跳梁に、地上での生活を諦めねばならなくなったエウメロスと黄金門の人々は地上への出入り口を閉じ、地下都市へ向けて地下道掘削に取りかかる。

同じころ、ネウトラ評議会は巨人族を殲滅させるべく原子爆弾の製造に乗り出そうとしてメッサナの化学者団と決裂する。爆弾製造の協力者として名乗り出た評議会西支部のコパーン博士は、製造工程の最後に使う素材、ブルー・マーキュリーを無人偵察機に搭載して送り出すが、偵察機はケストル王国北方の氷河地帯で制御不能に陥る。
ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっている皇帝の息子バイスロイ救出に向かう。
世界の果ての島からホシナ族に同行してきたスクナは旧知のヘルガと合流し、ケストル王国へ向かい、氷河決壊に巻き込まれる。

第五部
　太古の偉大な種族は世界中を結ぶ転送システムなるものを構築していた。そのステーションのひとつがケストル闘技場の地下にあり、ヘルガたちをいずこかへ転送する。彼らが到着したのは冥界最下層ミクトランであり、迎えたのは行方不明になっていたネウトラ評議会のダーヴェだった。
ダーヴェは仲間のヒューダー、イリチヤと共に巨人族を探索してミクトランへとたどり着いていたが、あまりに広大複雑な異次元空間での探索は遅々として進んでいなかった。しかしヘルガ、スク

ナ、バイスロイが合流したことによってメッサナで起こった音楽生迫害事件について情報交換が行われる。迫害されたメルノとバイスロイとは深い繋がりがあったのだ。メルノが今はミツハと名乗り、その外見がイリチヤに酷似していると知ったヒューダーは困惑する。かつて水精霊から生まれた子が名を取り上げられ無力な水棲生物に姿を変えられたという。『ミツハ』とは水精霊を意味するのだ。世界の果ての島からついてきたイモリに、イリチヤ＝槍と名づけたヒューダーだったが、彼に戦いを宿命づけてしまったかもしれないことに責任を感じる。
スクナとヘルガとはミクトラン脱出を敢行、そして、ミクトランの怪物が大挙して襲い来るさ中、イリチヤはミクトランの女王テクトリの手に落ち、巨人族生成の現場を見せられる。

第六部
テクトリらの前に突然現れた男は、底知れない力でテクトリとベネトナシュの巨人族増殖計画を簡単に握りつぶしてしまった。イリチヤの懇願によってダーヴェたちは地上、メッサナへ送られ、イリチヤは連れ去られてしまう。事態のあまりの急転はダーヴェたちに無力感と敗北感とをもたらし、メッサナ住民と苦楽を共にしてきたジャガーはアンベレオ王国の命令で全頭が捕獲されることに。ヒューダーはマミヤと再会し、つかの間の安らぎを得る。

そんな折、放火されたメルノの実家の前でバイスロイはひとりの女に出会う。ベレオーサ・シパド。彼女はアンベレオ本国から乗り込んできた先遣隊長で、バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受け、彼にメッサナ奪還記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。記念硬貨に刻まれるモデルとは、神の代理人たるイリチヤだった。

メッサナ市はベレオーサ市と改名され、新総督となったシパドはバイスロイに求婚するが、断られる。このことに逆上したシパドは意趣返しに次々と恐ろしいことを企み、全市民を恐怖に陥れるのだった。

奥付

Salamander in the circle

第三十四章 **死神の息吹・神々の再来**

2024年3月15日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail　blog　D & R

表紙素材　「月とサカナ」　イラストAC

制作　　Puboo

発行所　　デザインエッグ株式会社